

# 古代祭祀と大和三山の暗号

監事 藤原定明

平成18年4月13日、桜が満開に咲き誇る日、私は近鉄桜井駅で当会の渡辺会長を待っていました。その理由は、地元櫻井市出雲に在住の榮長増文氏と会長との出会いを作らせてもらうためでした。

榮長氏は三輪山東北地方（こもりく地方）の伝承等を40年の歳月をかけて調査研究され、三輪山の元になる元三輪山を発見されました。

元三輪山とは、本来の御諸山で三輪山のモデルになったダンノダイラ、巻向山、泊瀬山等の連山（諸山）です。榮長氏の「真実を後世の人に伝えたい」との情熱が今回の出会いにつながったのです。

その日、私と会長は下三輪山の中心「ダンノダイラ」にご案内いただいたのですが、その途中「箸墓古墳はもとほ円墳で、前方後円墳に作り変えられたのは、それは方位を示しているのでは？」との私の言葉に「それは面白い考えですね、是非論文に・・・」と言う会長の提案でペンをとらせていただくことになりました。

翌日三輪山周辺の地図をコピーし

て祭祀の形を見ました。その地図をもう一度よく見ると（ちょうど6年前グラハムハンコック氏を三輪山周辺に案内するために見たのです）榮長氏の発見された元三輪山を中心とする古代祭祀形態（ダイヤ形）の西が箸墓で東が天神山だと思っていたのですが、そうではなく、西が松原神社だった事に気がつきました。（耳成山延長ラインの角度を間違えていた）軽率な間違いにショックでしたが、そのおかげで新たな発見があり、元三輪山祭祀形態への確信も更に強められました。

さっそく地図の中に古代祭祀を再現したいのですがその前に今回のテーマ箸墓古墳について言及したいと思います。

箸墓古墳は宮内庁治定の陸墓のため墳丘に立ち入る事は出来ませんが、その北側の大池の護岸工事に伴う発掘調査が寺沢薫氏らによって行われました。その調査結果によると、箸墓の後円部は五段築成され、その

斜面は葺石で覆われているが前方部側面には段築も葺石も無く、前方部北側に幅10メートルほどのテラスがあるだけで、後円部と前方部が違う姿になっています。（図・1）通常の前方後円墳は図・2が示すように後円部の築段と前方部斜面の築段がつながっているのです。

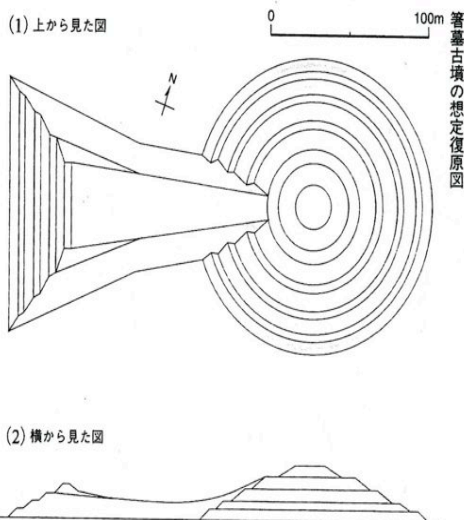


図-1

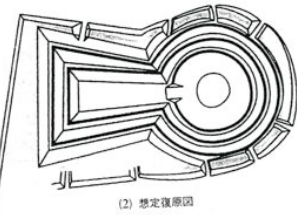
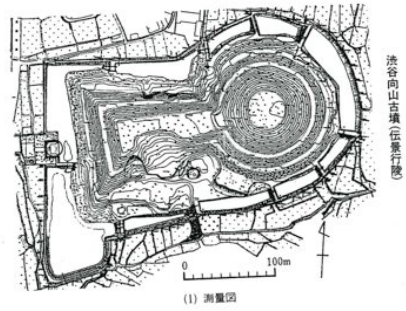


図-2

「大和の原像」の著者、小川光三氏も箸墓古墳の前方部と方位を関係付けて論を進めておられます。

(図・3)は三輪山と元三輪山を中心とした古代祭祀(ダイヤ形)を示したものです。

小川氏は「大和の原像」で箸墓方位線は三輪山の北の祭祀場、弓月岳にあった兵主神社(大兵主神社の中社)を指すと言われています。

ところで、この箸墓から大兵主神社へラインを引くと、そのラインは元三輪山の北の祭祀場、元松原にあった若御魂神社(大兵主神社の上社)を指します。

つまり、箸墓方位線は三輪山ダイヤ形の祭祀の場を指し、箸墓大兵主神社ラインは元三輪山ダイヤ形の北の祭祀場を指す事になります。言い換えれば円墳だった箸墓に前方をつけて方位を示す事と大兵主神社の位置で二つのダイヤ形のそれぞれ北の

さらに、前方と後円では、種類の異なる土器が検出される等の理由から「元は円墳だったものに前方を付け加えて前方後円墳にしたのではないかと」と言われています。更に、後円部5段目(最上段)が直径17メートルの円形平坦面となっていて、他の前方後円墳と比べるとその規模も他に例がありません。いわば「聖壇」を4段目の広い平坦面に築き、それが5段目になっっているようです。つまり、墳墓と言うより「祭壇」として機能していたのではないかと言われています。

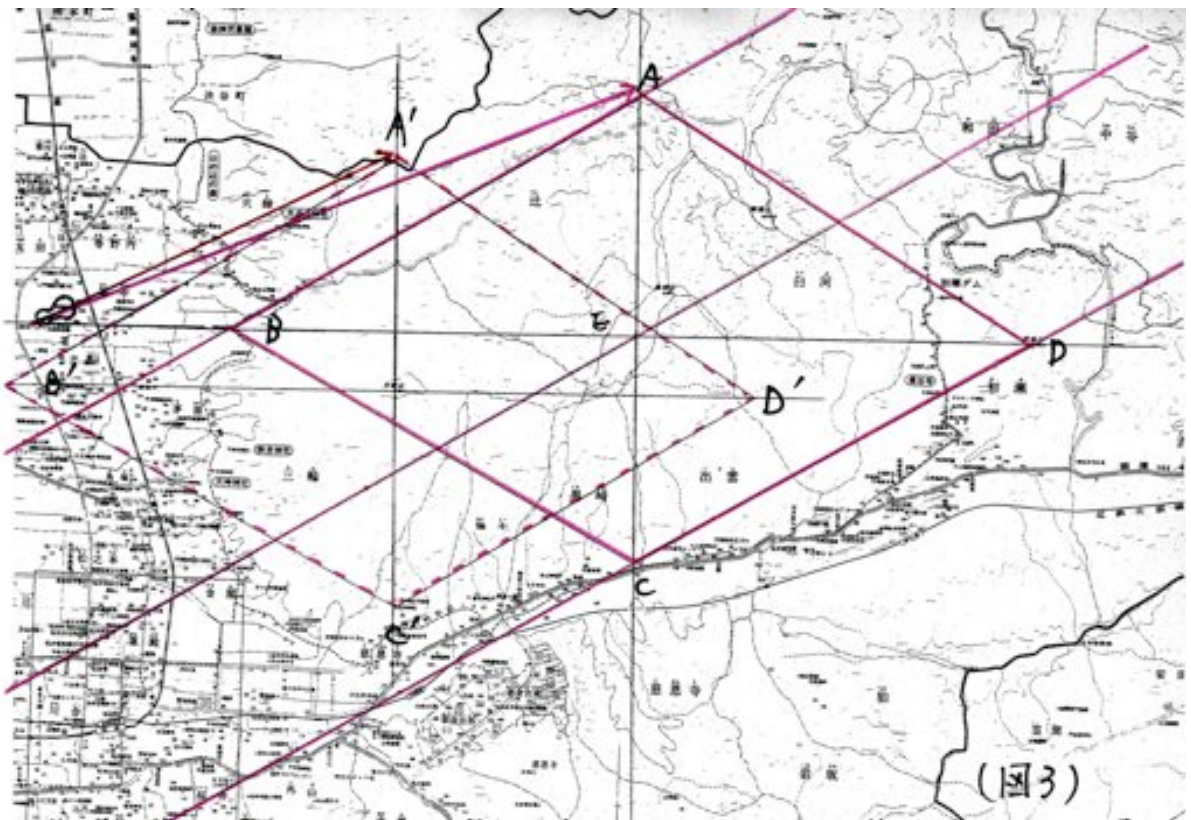


図-3

祭祀場を示す事が出来るのです。しかも、大兵主神社は三輪山祭祀ライン(A, B, C)上にあります。

これは偶然ではなく大は箸墓と元三輪山ダイヤ形の北の祭祀場、若御魂神社へのラインと三輪山ダイヤ形の祭祀ライン(A, B, C)の交わった点を選んで建てられたように思われます。大兵主神社は兵主神社(中社)と若御魂神社(上社)を合祀した神社で箸墓方位線(兵主神社を指す)と箸墓大兵主ライン(若御魂神社を指す)と言われています。さらに、この兵主に大の字をつけたのが大兵主です。大とは「おう」と読むことができ、秦氏と同族ではないかと言われている多氏と関係しているように思われます。多氏の関係から、三輪山の真西にある「多神社」や古事記の編纂に携わった太安万侶も思いうかがびます。いずれにしても、この頃、日本の古代祭祀は変更されたものと思われまます。

「日本書紀」によると、天孫降臨にさきだち派遣されたタケミカズチとクツヌシの報告では、先住民の崇拜しているアマツミカボシ別名アメ

ノカカセオという悪神を誅殺しなければいけないとあります。つまり星神が天孫降臨の障害だったのです。

果たして、古代の日本に星神信仰があったのでしょうか。その疑問は今回の驚くべき発見が答えてくれます。

それでは、次の図(図-4)を見て下さい。

大和三山は元三輪山ダイヤ形の北東から南西に引かれた3本の平行なライン上にあり、対応関係にあるのは明らかです。地図上ですが、コンパスを使用して確認すると、大和三山が△A, B, C, の辺A, B, はダイヤ形の辺A Bと同じ長さでした。しかも△A, B, C, は二等辺三角形(A, B, C)になっています。

この三角形(大和三山)を平面上に作図しようと思ったら、ダイヤ形A Bラインを下へ延長し、ダイヤ形の中心(E)から上のラインに平行にラインを延長し、更にC Dラインを下に延長させ、真ん中のライン上にコンパスを辺A Bとおなじながさ

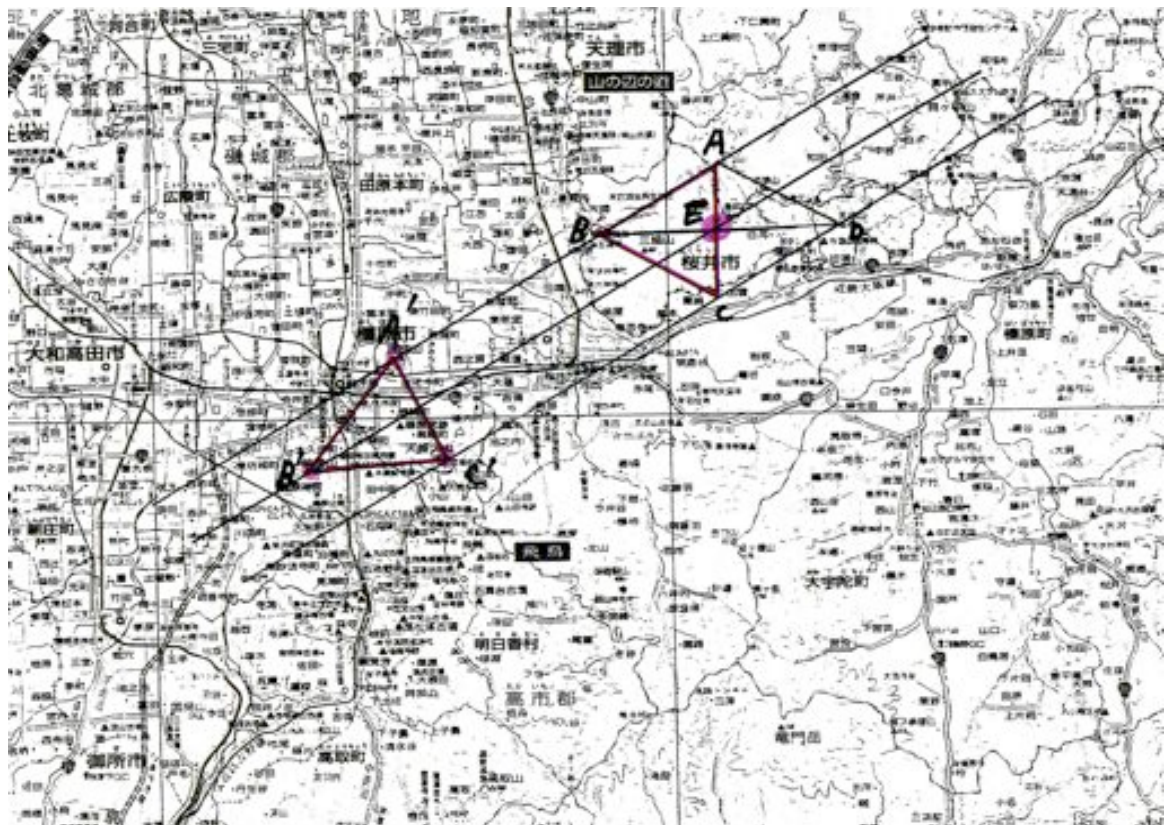


図-4

にあわせて、B、点に針を置いて円を描き、上と下のラインのそれぞれの交点を求めれば、三点が求められ、この三角形を作図する事ができます。つまり、B、(畝傍山)を中心とする円(半径 $\parallel AB \parallel A, B,$ )の上のラインの交点が耳成山、下のラインの交点が天香久山になるわけです。

では、何故辺A、B、を辺ABと等しくしたのかと言う疑問が生じます。ダイヤ形の中の $\triangle ABC$ は正方形です。 $\triangle A, B, C,$ は $AB \parallel A, B,$ 、 $BC \parallel B, C,$ の二等辺三角形で正方形ではありません。よく似た三角形ですが、角度と底辺の長さが少し違います。もしかしたら辺A、B、で辺ABの長さを残しておきたかったのではないのでしょうか。

辺A、B、を辺ABと等しい距離にしておけば、もし古代の祭祀場の場所がわからなくなっても(実際に封印されている)耳成山から桧原神社へのラインの延長線を引き、桧原神社からA、B、の等距離の所が古代の祭祀場であることを確認できます。つまり桧原神社の位置で古代の

祭祀が確認できるわけです。

桧原神社は大神神社の摂社になっていますが、大兵主神社の位置同様(箸墓から大兵主神社へラインを引きそのラインを更に延長すると若御魂神社と交わる)古代の祭祀場(若御魂神社)を示す位置にあります。またこの桧原神社にも大神神社同様三つの鳥居があります。小川氏は、「大和の原像」の中で三つの鳥居の謎を説明されましたが(図・5) 桧

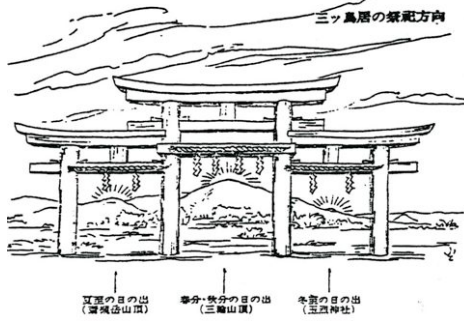


図 - 5

原神社の三つの鳥居を東に向ければ三輪山祭祀同様、北の若御魂神社、

中央の元三輪山、南の地点からそれぞれ夏至の日の出、春分秋分の日の出、冬至の日の出を確認できます。(図・5参照)

そしてこの祭祀形態はどういうわけか、マヤの神殿祭祀形態と同形です。(図・6参照)

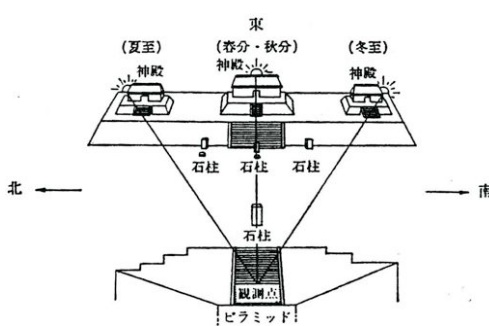


図-6

それはさておき、桧原神社は古代祭祀場(若御魂神社)を示すポイントに建っていて、しかも古代の祭祀形態を示す三つの鳥居が置かれているのです。

この三つの鳥居も元三輪山祭祀形態(ダイヤ形)を示す暗号かもしれません。

ここでもう一度(図・4)を見て下さい。

大和三山で作る三角形と古代祭祀形態のダイヤ形に対応関係が見られるのは明らかです。

そこでB、点(畝傍山)です。

たまたまその場所に定めたのでしょうか。そうではなく、その場所に定めなくてはいけない理由があったのではないかと思えるのです。それではその理由とは何なのか？

その時、ダンノダイラ散策中に話された渡辺会長の言葉を思い出したのです。「ゾロアスターの祭壇は北から南を望むように作られていて、北が南北線から西へ20度ふれているのですが、この場所から南の祭壇を見れば冬至の日の午前0時にシリウスが見えるのです。これは柳原さん(本学会専務理事)にステラナビゲーションで確認してもらってわかった事です」というものでした。もしかしらこの三角形(大和三

山)はオリオン三星を地上に再現したギザのピラミッドのように天体を地上に再現したものではないか。そして天体図を見ればこの三角形とダイヤモンド形もわかるのではないかと思います。このコンピュータソフトは非常に便利で、時間と場所を設定すれば例えば自分の誕生日に自分の生まれた場所(大阪の和泉市)から見ればどの方向にどんな星があったのかを知る事ができるのです。

そこで先ず場所を奈良の桜井市に設定し、取りあえず時間をエジプトのピラミッドがオリオン座と対応していると言うBC10450年の冬至の日の夜中の0時、つまり12月23日、0時0分0秒にセットして天体を見ることにしました。

するとどうでしょう。牛飼い座のアルクトウールスとしし座のデネボラ、おとめ座のスピカでつくる春の大三角形が見えるではありませんか。次にその天体図に高度方位線を入れると、その三角形は天頂の近くで、さらに人の立つ位置を変えると、三

角形が天頂中心に360度回転するではありませんか。

つまり、BC10450年12月

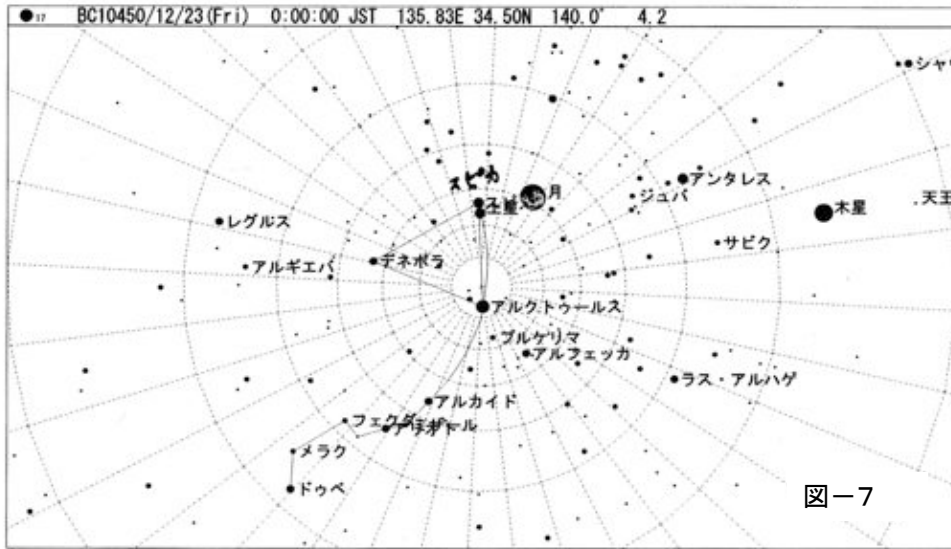


図-7

23日、0時0分0秒に奈良の桜井から星空を見上げると自分の立つ方角によって同じ三角形が天頂を中心

に場所を変えるのです。

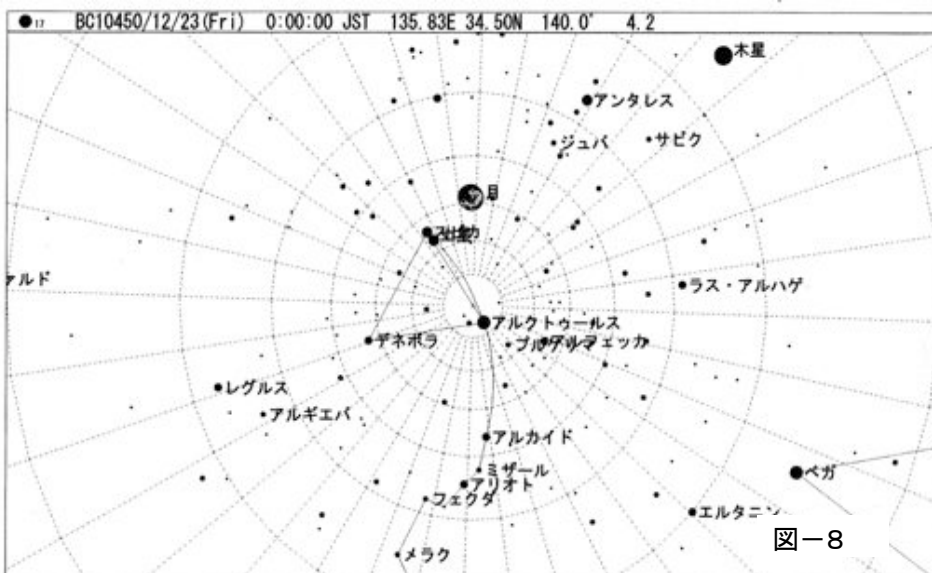


図-8

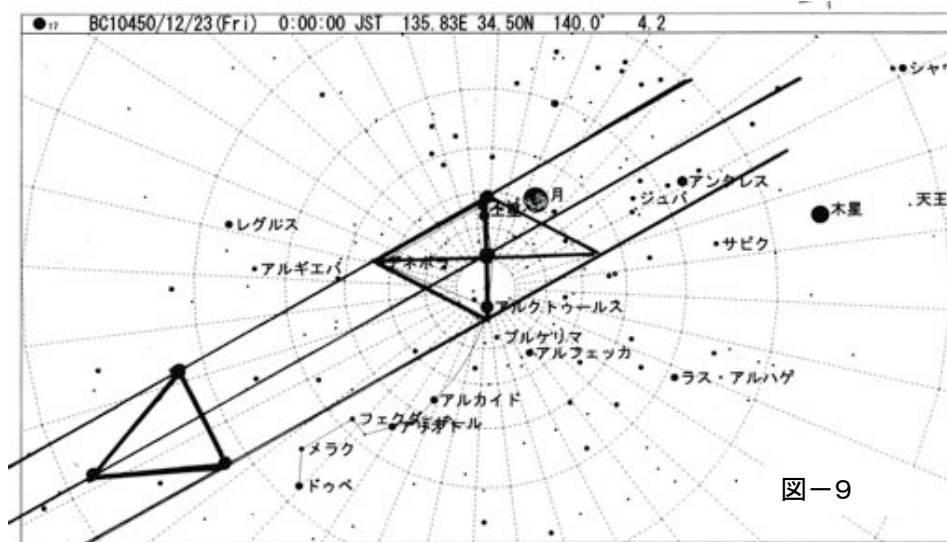
それが次の図です。

(図-7)はダイヤモンド形の中の三角形の配置に、(図-8)は大和三山の三角形の配置に近づけたときの天体図です。

先ず図-7を見て下さい。スピカとアルクトウールスを結んだラインと天頂の中心が交わり、そのライン(ほぼ南北線)上にスピカ、土星、アルクトウールスの三星がたてに並んで見えま

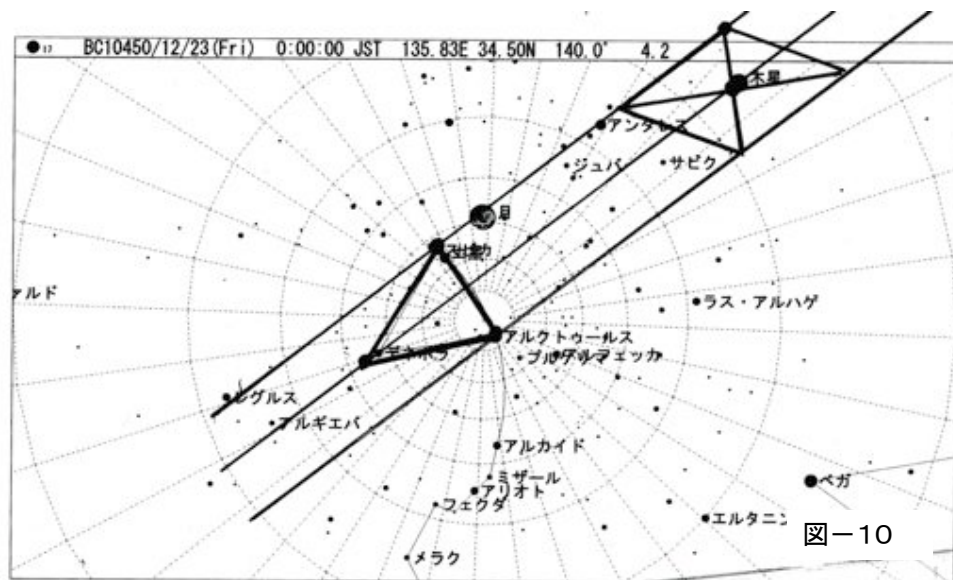
す。非常に特殊な星の配置のように見えます。

そしてこの天体図の三角形に地上のダイヤモンド形を重ねると殆どぴったり重なり



ます。(図・9参照)  
 地図上のダイヤ形を中心は天体図  
 の天頂の中心より少し上のほう

に位置しています。その場所へ、私と渡辺会長は榮長さんに案内していただいたのですが、そこには「ダ  
 ンノダイヤ」と呼ばれていて、5段  
 構造の天壇の跡ではないかと  
 思われるような遺跡が残され  
 ていました。  
 道教思想によると、天壇と  
 は、都城の南の地で冬至の日  
 に皇帝(人々の王)が天帝  
 (神々の王)を奉祀した祭壇  
 の事です。南の天壇に対して  
 北には古代元三輪山祭祀場の  
 若御魂神社があります。この  
 天体図を見れば若御魂神社の  
 南が天の中心、天頂にあたり  
 ます。天壇とは天の中心、天  
 頂からそう呼ばれるようにな  
 ったのではないのか。  
 冬至の日、天壇に立つと太  
 陽が沈む方向に畝傍山が見え  
 ます。そして、BC1045  
 0年12月23日、0時0分  
 0秒、冬至の日没を過ぎた真  
 夜中、天壇から眺めた天体図  
 と地図を重ねると、中国の天  
 壇思想の故郷はこの地ではな



いかと行ってしまいます。  
 それでは次に(図・10)を見て  
 下さい。

この図は、(図・8)の天体図に  
 大和三山と古代祭祀(ダイヤ形)を  
 重ねたものです。スピカと耳成山、  
 アルクトゥールスと天香久山がびつ  
 たりと重なったとき、デネ  
 ボラは畝傍山よりやや北東  
 方向(ダイヤ形との対応ラ  
 イン上)にずれます。  
 そこで、デネボラと畝傍山  
 をびったり重ねるとスピカ  
 とは、耳成山、天香久山よ  
 りそれぞれ北東方向(ダイ  
 ヤ形との対応ライン上)に  
 ずれます。  
 しかしどちらの場合も図  
 (10と11)を見ていた  
 だければわかるように三角  
 形とダイヤ形の対応ライン  
 上に三つの星が位置し、ひ  
 ととき大きな星、月もダイ  
 ヤ形と三角形のライン上に  
 位置しています。  
 そして、両方(図・10  
 と図・11)とも天体図の  
 月の次に大きな星、木星が  
 驚く事にダイヤ形の中心と  
 ほぼ重なるのです!



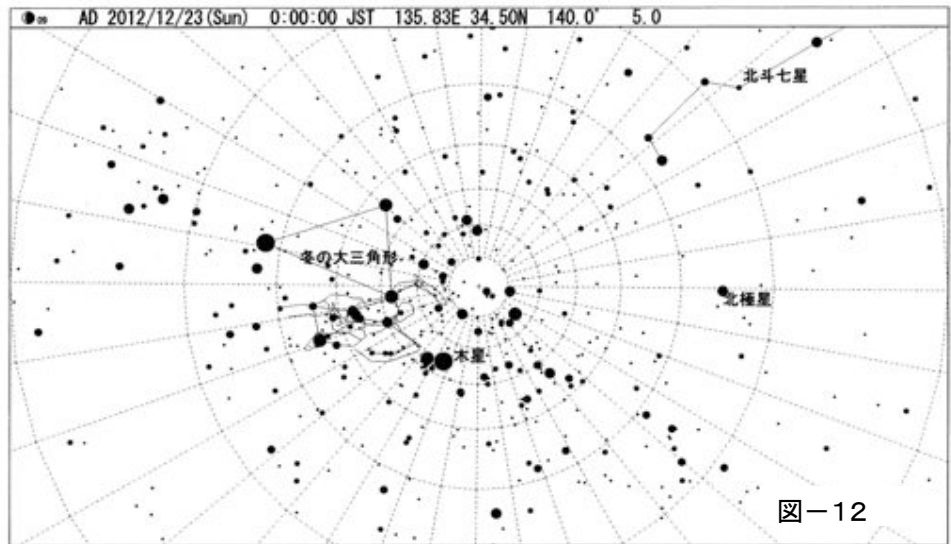


図-12

図は図・13に大和三山とダイヤ形を対応させた図です。

見ていただければお分かりのようにシリウスと畝傍山がぴったり重なり、プロキオン、ペテルギウスは耳成山、天香久山と少しずれますが、今度はポラリスと驚く事にダイヤ形中心が見事に重なるではありませんか！

ん。意味の真意はともかく、注目する並びであると言えます。

次に図・14を見て下さい。この

いる事になります。

これも偶然なのか。

もし偶然だとすれば、その確率は限りなく0に近い数字をはじくでし

よう。もはや偶然の一致とはいえないレベルの事柄です。と言う事は、大和三山の設計者は、エジプトのピラミッドを刻んだBC10450年とマヤカレンダーの終わりの日AD2012年12月23日0時0分0秒という特別な時間の天体の配置をステラナビゲーターをコンピューターの画面で見っていたほど正確に知っていて、一つの三角形（大和三山）で二つの天体図の冬の三大角形と北極星（最高神）の対応関係で古代祭祀（ダイヤ形）の中心のきわめて正確な位置を示すために設計図を作ったということになります。

もはや神業と言っていていろいろの設計者にとってエジプトのピラミッドのように、天体と完全に一致させる設計図など簡単に作れたはずですよ。

それでは、この設計者はどうして古代文明の遺産が残されたエジプト

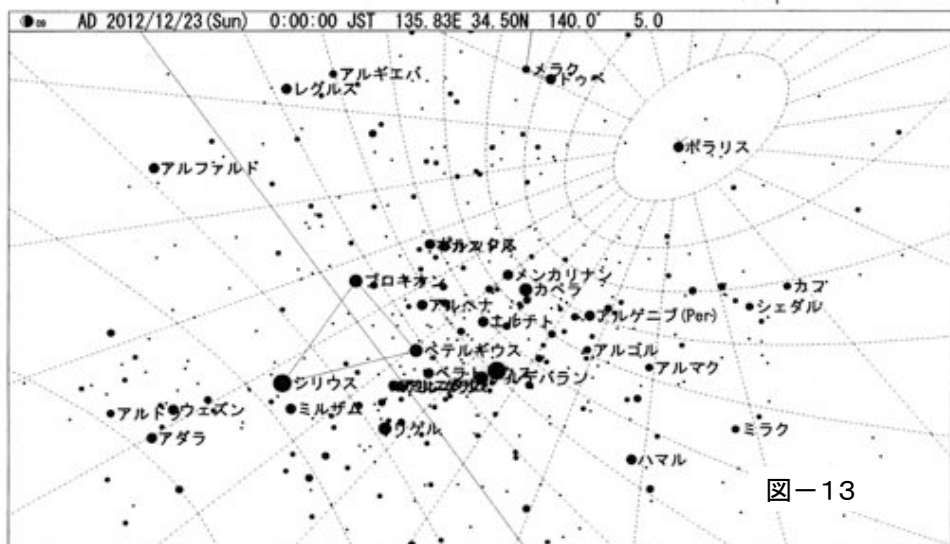


図-13

とマヤに刻まれたBC10450年とAD2012年12月23日の2つのときと2つの天体図で日本の古代祭祀を示したのか？



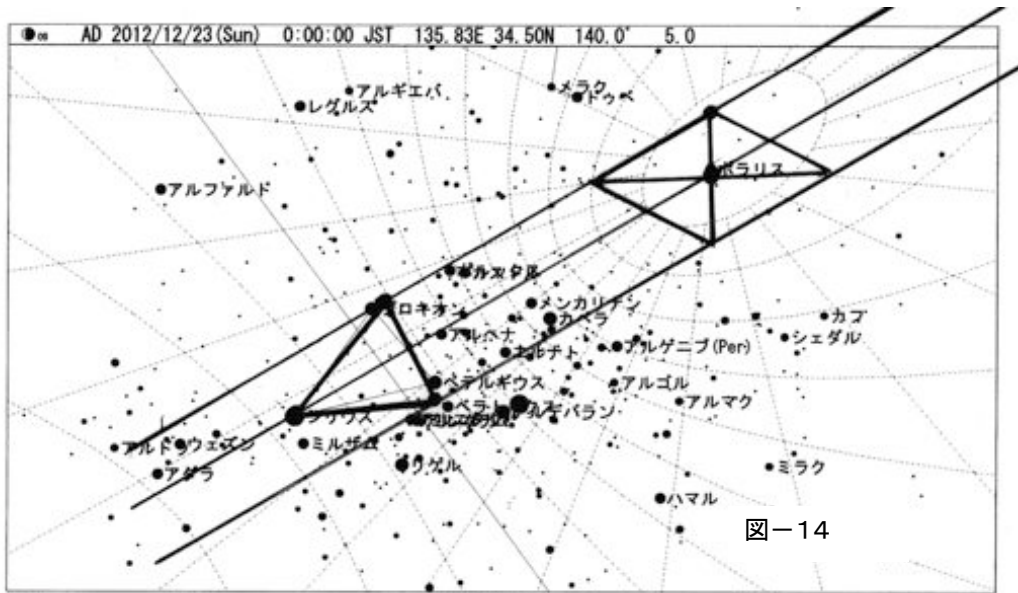


図-14

そこにはどんなメッセージがこめられているのか？古代日本とエジプト

がっていた時代があったのかもしれない。

トやマヤにはどんなつながりがあるのか？  
 ギリシャ神話や道教思想で、どうして天体相似形の古代祭祀の意味が理解できるのか？  
 それらの事もどうしても知りたくなります。  
 日本を世界地図の中心にすれば西の地には古代文明が残されたエジプトが存在し、東の地には古代文明が残されたマヤが存在しているのは偶然ではなく、紛れも無い事実です。  
 同様に日本に残された神々の指紋は、西の地に残された神々の指紋と東の地に残された神々の指紋をもしかしたらつないでいるのかもしれない。  
 古代のある時代何千年かあるいは何万年か前、世界は日本を中心につな

いずれにしても、様々な疑問に答えるには原稿提出期限に到底間に合いません。もしお許しいただけるならこの続きは次回にやらせていただきますと思います。  
 寄り道が長くなりました。(そのおかげでエキサイティングな発見ができたのですが)  
 今回の主題、箸墓方位線の結論を出さねばなりません。  
 大和三山と古代祭祀(ダイヤ形)の関係で見られるように、超古代には星神信仰があったことが明らかになりました。前述したように、箸墓方位線は方位(夏至の日に近い日の太陽の日の出を指している)によって目を星から太陽に向けさせる(星神の封印)と同時に、その方位は古代の祭祀場(三輪山の北の祭祀場、兵主神社)を指しているように、封印して暗号化するという仕掛けがそこにもあるように感じてなりません。  
 それでは何故、徹底的に封印しないで、暗号を残したのか？  
 そのこともやはり知りたくありません。もしかしたら、封印者は大和三

山の設計者と何千年、いや何万年の時を隔ててつながっているのかもしれない。

渡辺会長や柳原専務理事、そして榮長さんのおかげで非常にエキサイティングな発見ができて感謝しています。  
 そして今、私は「これも偶然ではない」と感じています。

了

参考資料

- 「日本の超古代宗教の謎」 佐治芳彦 日本文芸社
- 「大和に眠る太陽の都」 渡辺豊和 学芸出版社
- 「大和の原像」 小川光三 大和書房
- 「まほろばの歌がきこえる」 現れた邪馬台国の都(株) エキサイト
- 「大和出雲の新発見」 榮長増文
- 「神々の指紋」 クラム・ハンコック 翔泳社
- 「甕つた神々」 藤原定明 文芸社